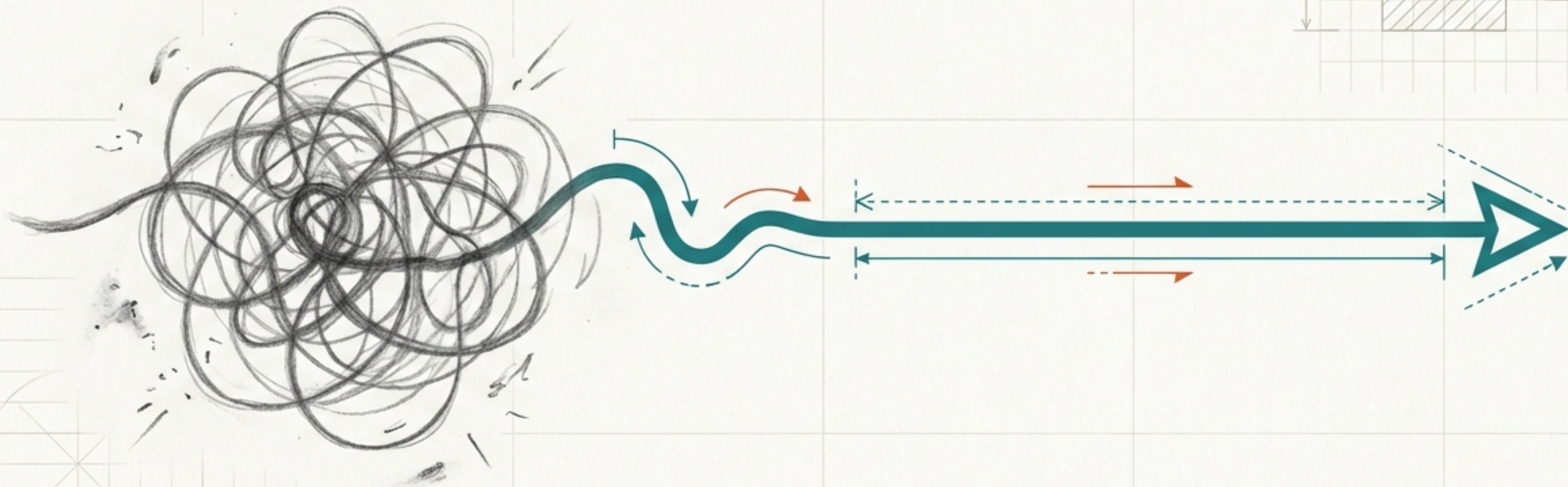


業務をロボットに伝える技術

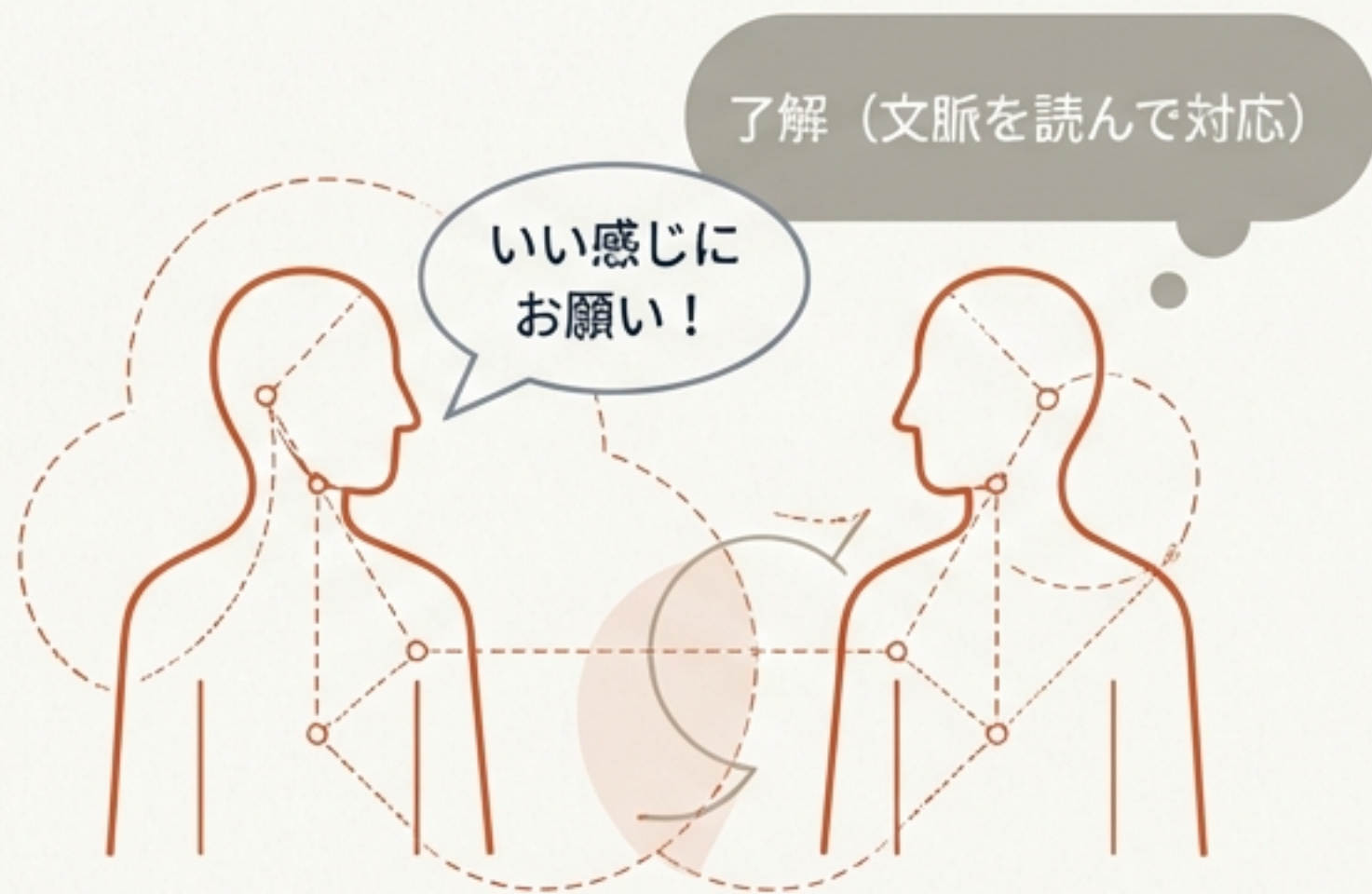
非エンジニアのための「プロセス記述」と「業務可視化」入門



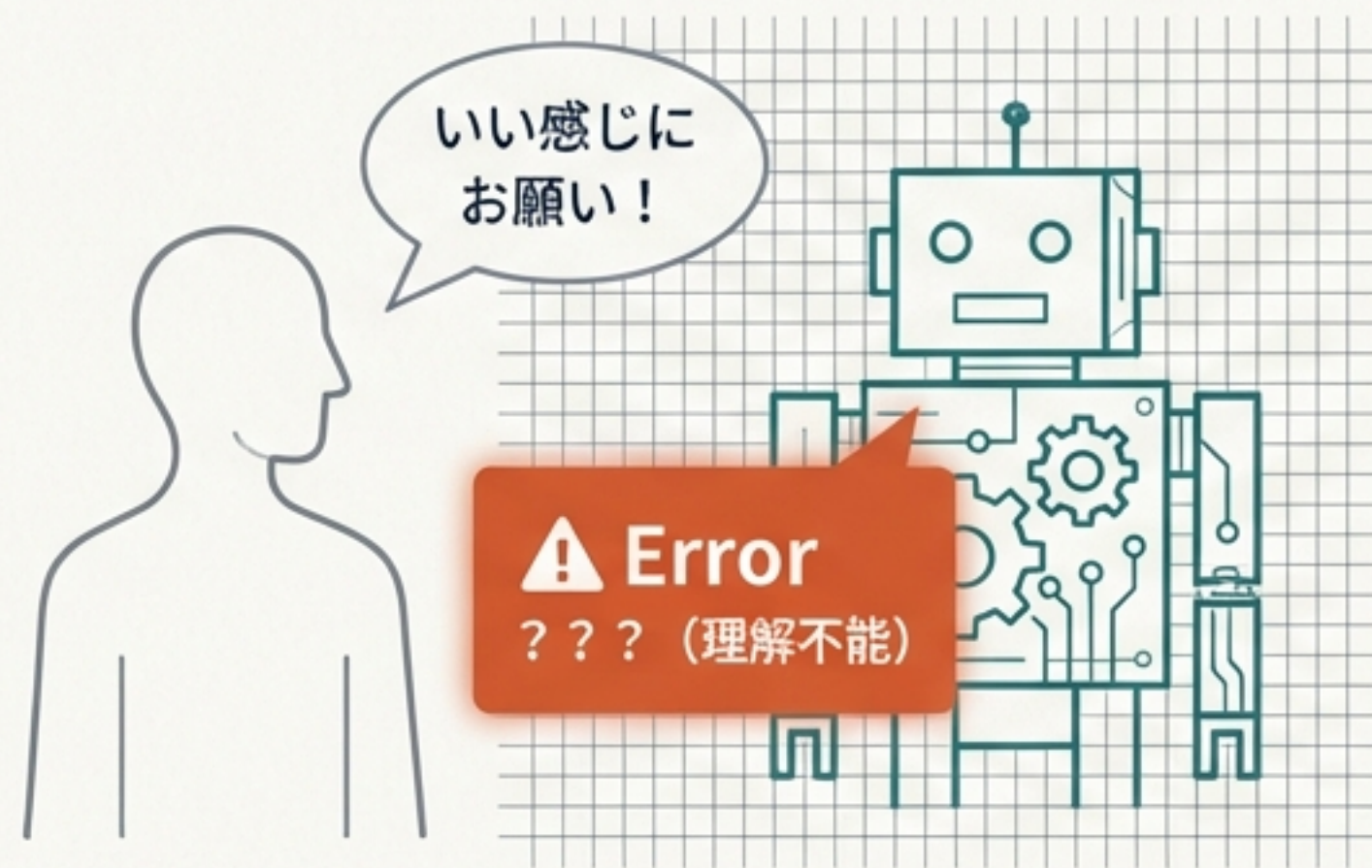
曖昧な指示を、確実な動作へ。

人間とコンピュータの決定的な違い

Human / 人間



Computer / コンピュータ



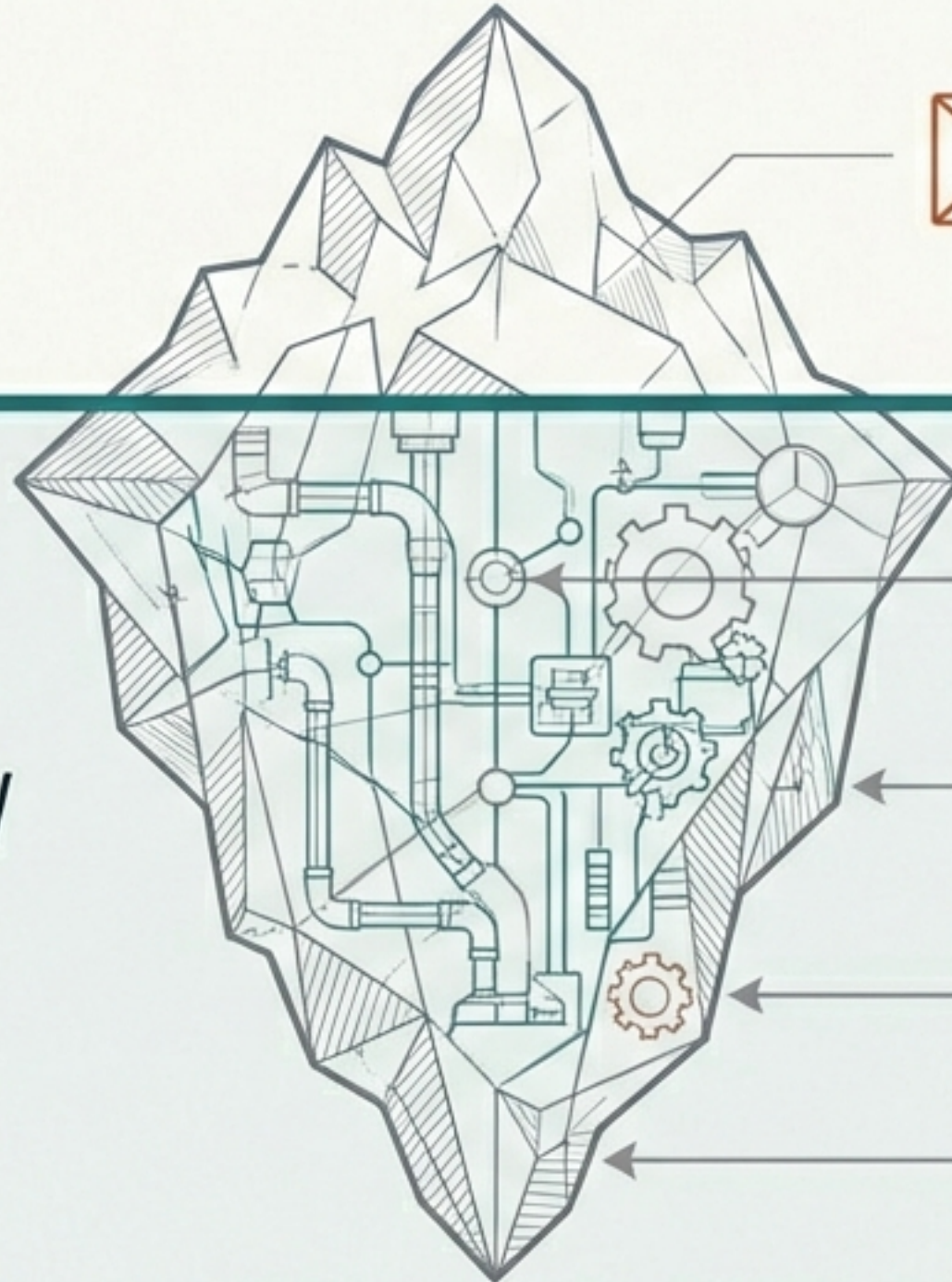
コンピュータは「超・真面目なロボット」です。曖昧な指示は一切通じません。
業務を自動化する第一歩は、私たちの言葉を「具体的で論理的な手順」に翻訳すること（プロセス記述）です。

業務の「水面下」にあるものを可視化する

業務の結果 /
Output



暗黙のプロセス /
Implicit Process



どこで判断を変えた？

誰に引き継いだ？

例外はどう処理した？

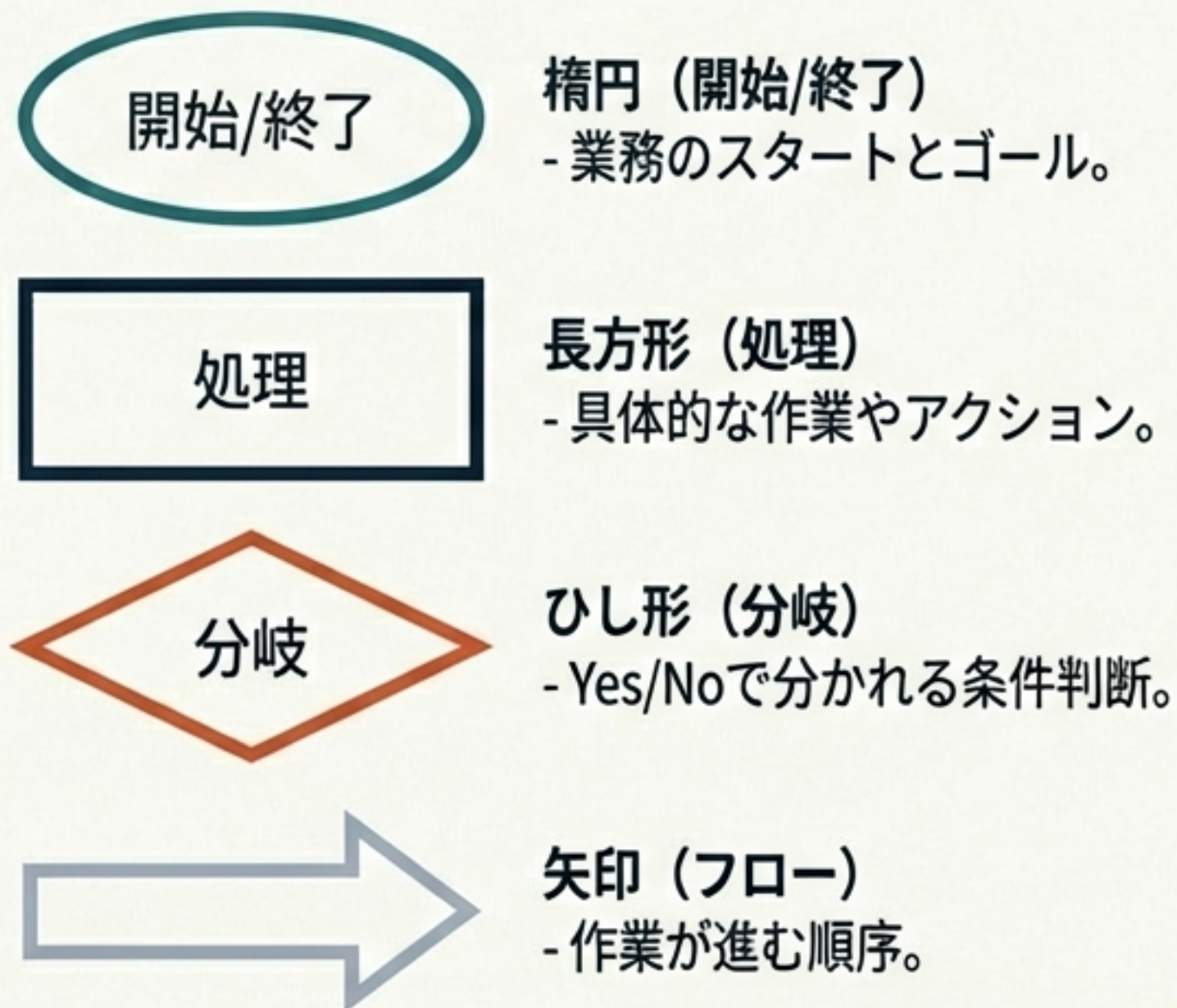
作業の境界線はどこ？

私たちの日常業務の多くは
「なんとなくの流れ」や「
暗黙知」で行われています。

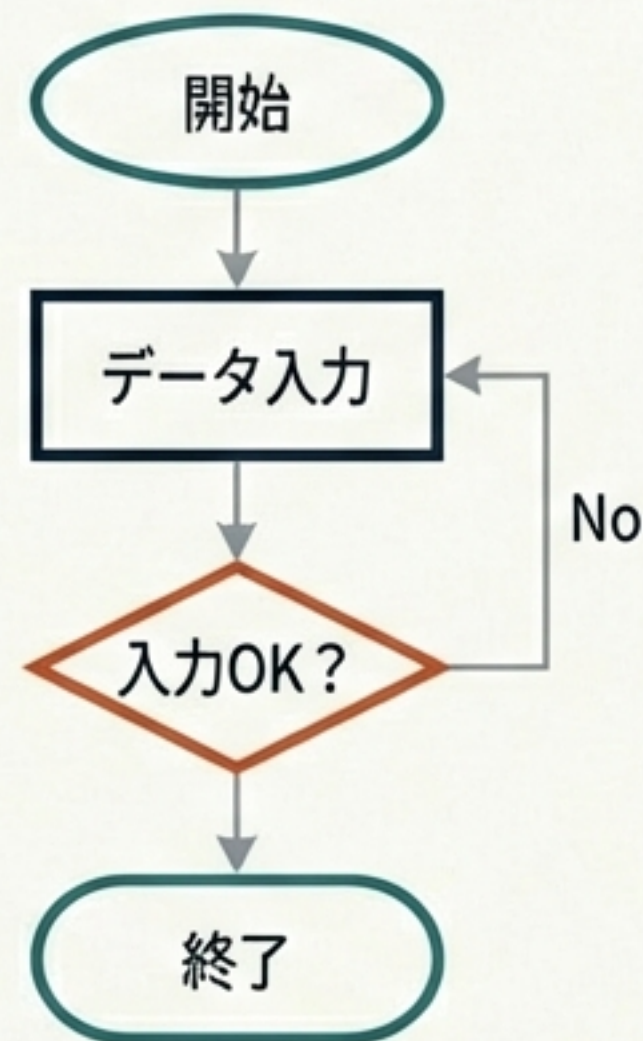
しかし、ロボットに仕事を
任せるには、この水面下
にある手順・条件・判断を
すべて言語化し、可視化す
る必要があります。

ロボット語の基本文法：フローチャート

凡例 / Legend

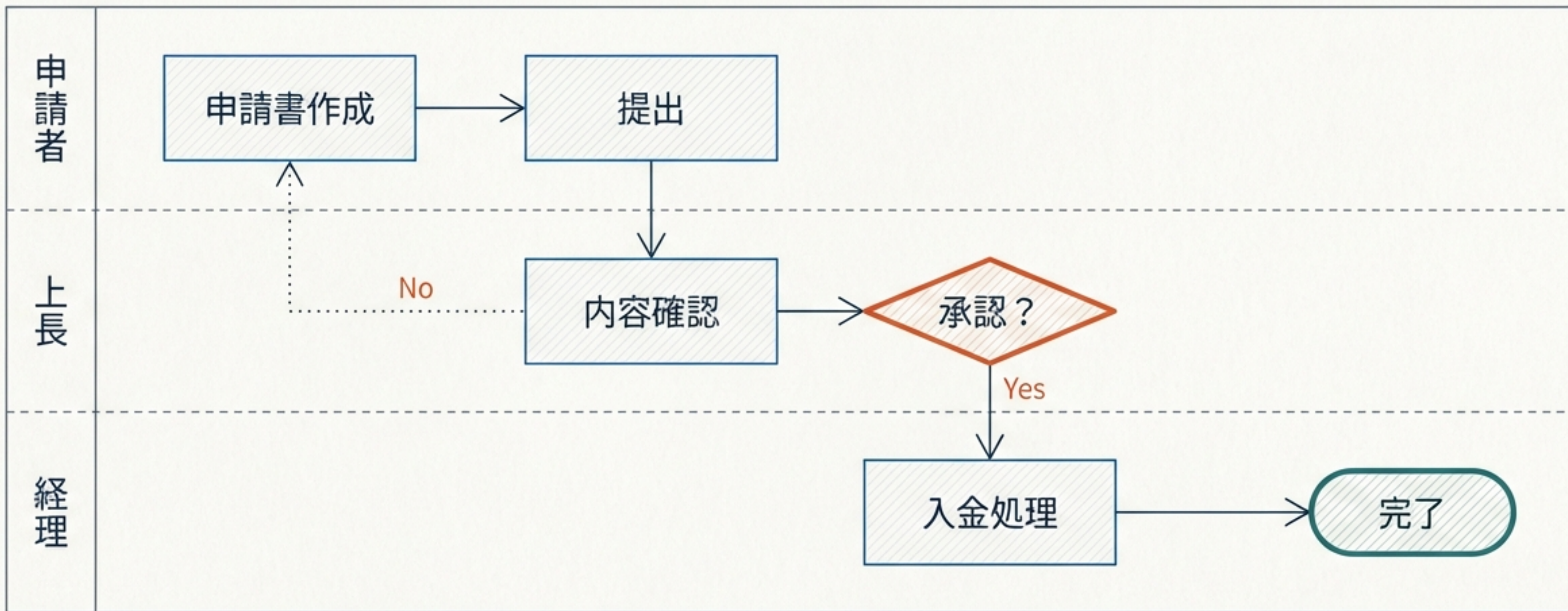


使用例 / Example



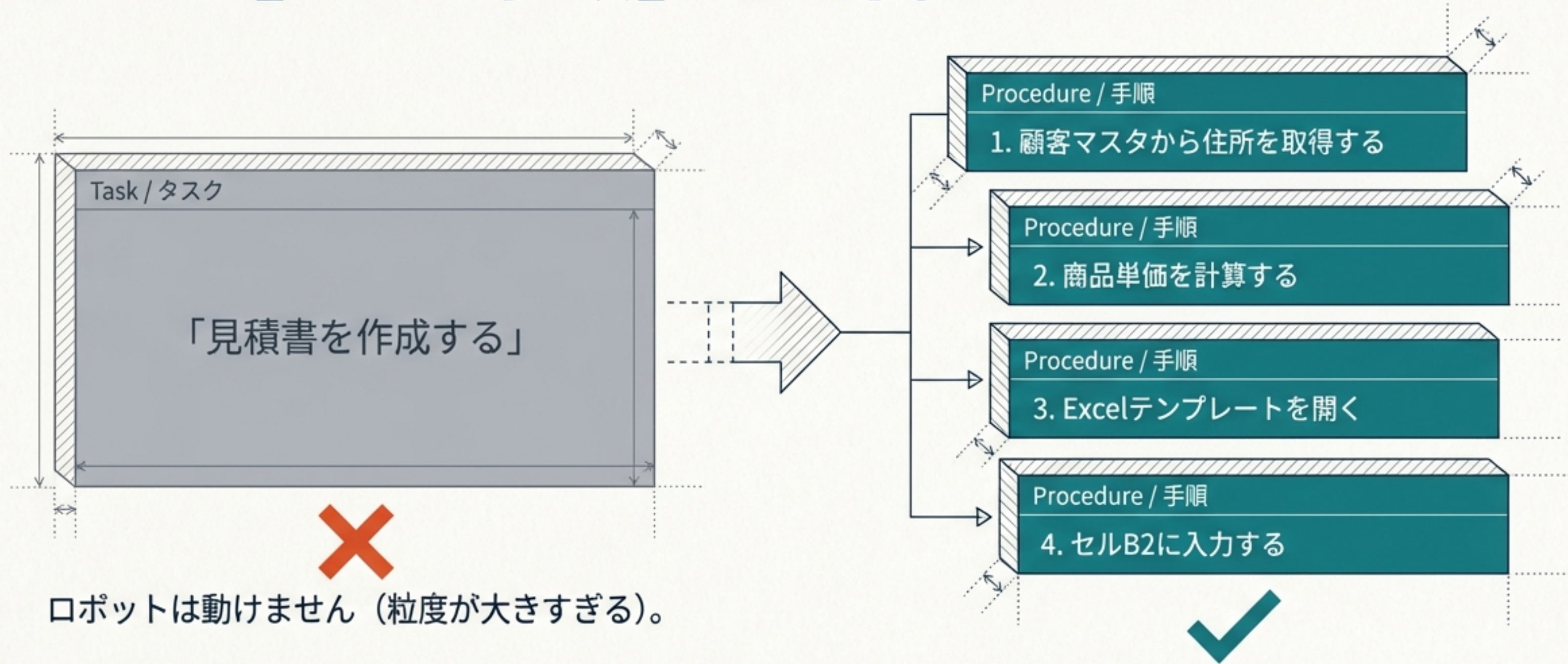
どんなに複雑に見える業務も、基本的にはこの4つの記号の組み合わせだけで表現できます。

「誰が」やるかを明確にする：スイムレーン



手順だけでなく、担当者の境界線（レーン）を引くことで、責任の所在とボールの受け渡しが明確になります。自動化においては「ここは人間」「ここはロボット」というレーン分けが設計図の基礎になります。

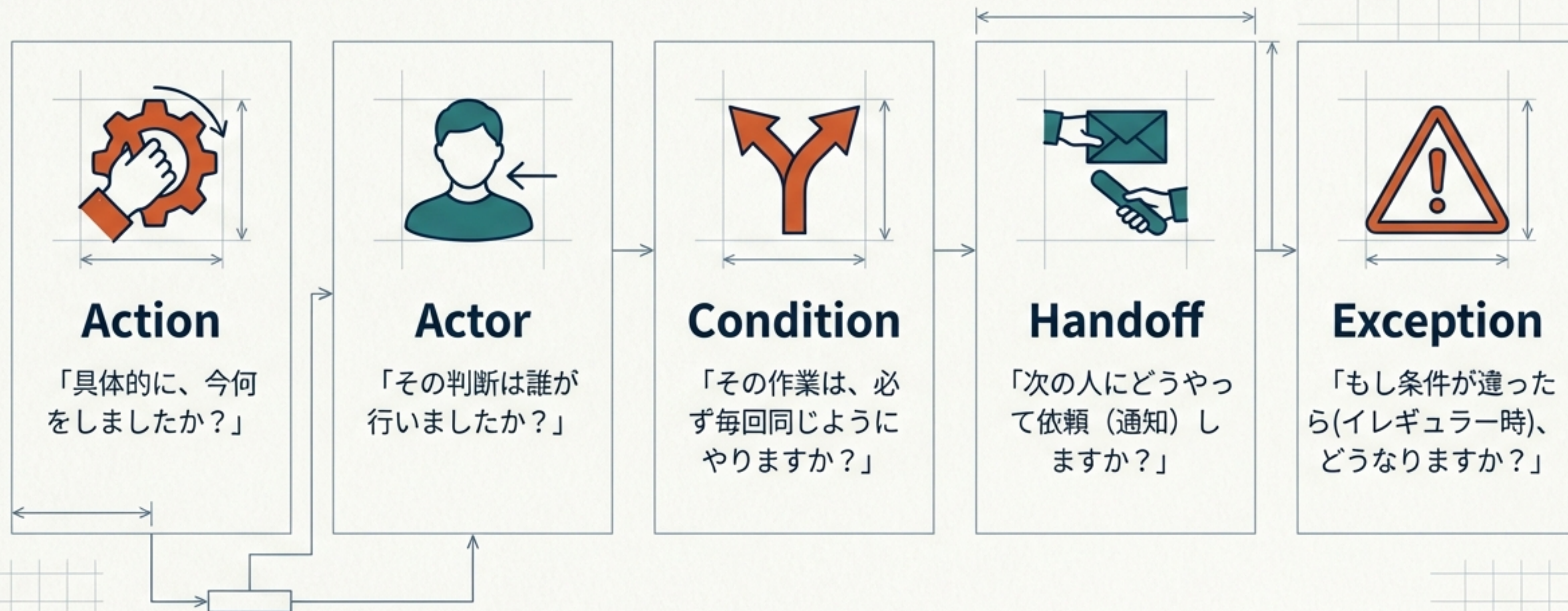
「タスク」と「手順」を混同しない



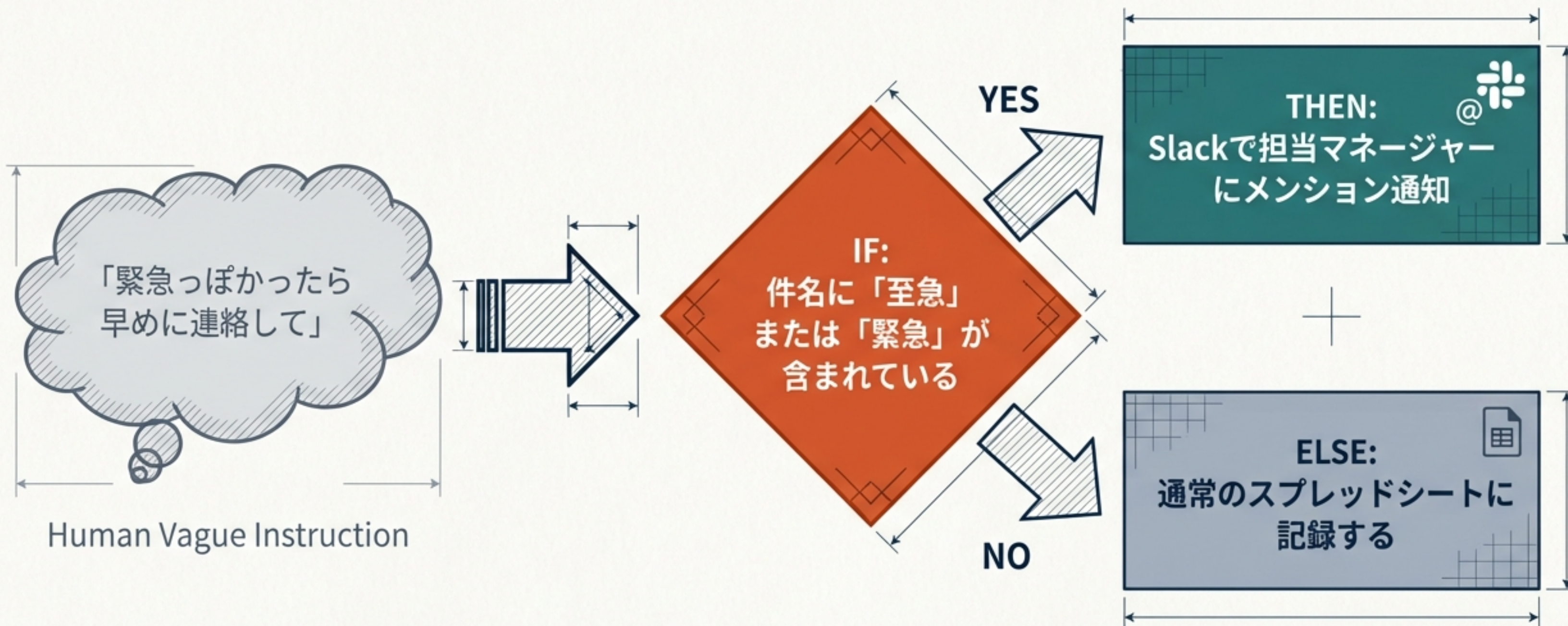
タスク: 目的を持った一塊の作業。自動化の「範囲」を決める単位。

手順: 実行可能な最小単位のステップ。自動化ツールの「モジュール」になる単位。

隠れたプロセスを掘り起こす「5つの質問」



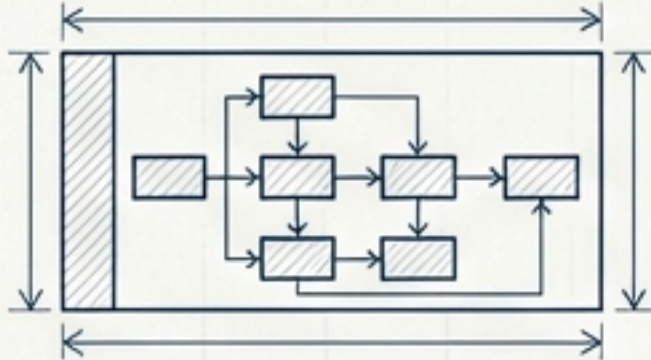
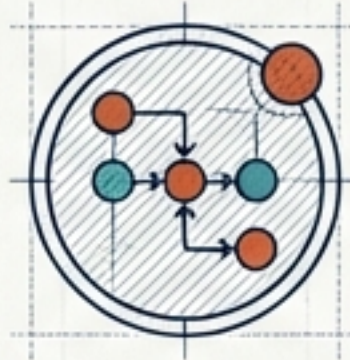
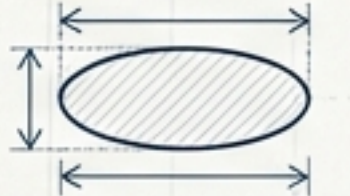
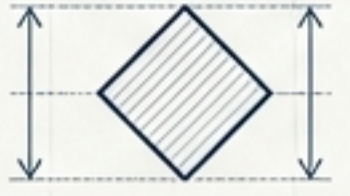
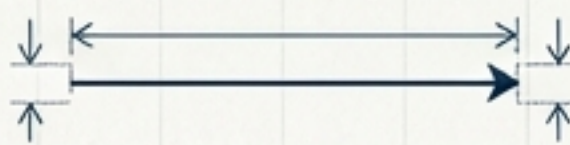
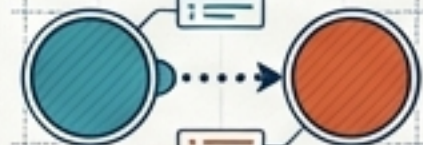
暗黙のルールを「条件分岐」に変える



ロボットは「空気」を読みません。「どのデータをトリガーにして道を変えるか」を定義するのが分岐設計です。

プロセス記述を「Make.com」に翻訳する

フローチャートが書ければ、自動化の実装はパズルを組み立てる作業に変わります。

Architectural Symbol		Make.com Icon	
	プロセス全体	→	 Scenario (シナリオ) Icon: A workflow overview
	Rectangle Shape	→	 Module (モジュール) Icon: A Make.com circular app bubble
	Ellipse Shape	→	 Trigger / Watch系モジュール Icon: A Make.com bubble with a clock or lightning
	Diamond Shape	→	 Router + Filter Icon: The purple Make.com Router dots
	Arrow Line	→	 データのマッピング Icon: A dotted line connecting bubbles

実践例：問い合わせ対応（Before）

緊急時は？

誰に報告？

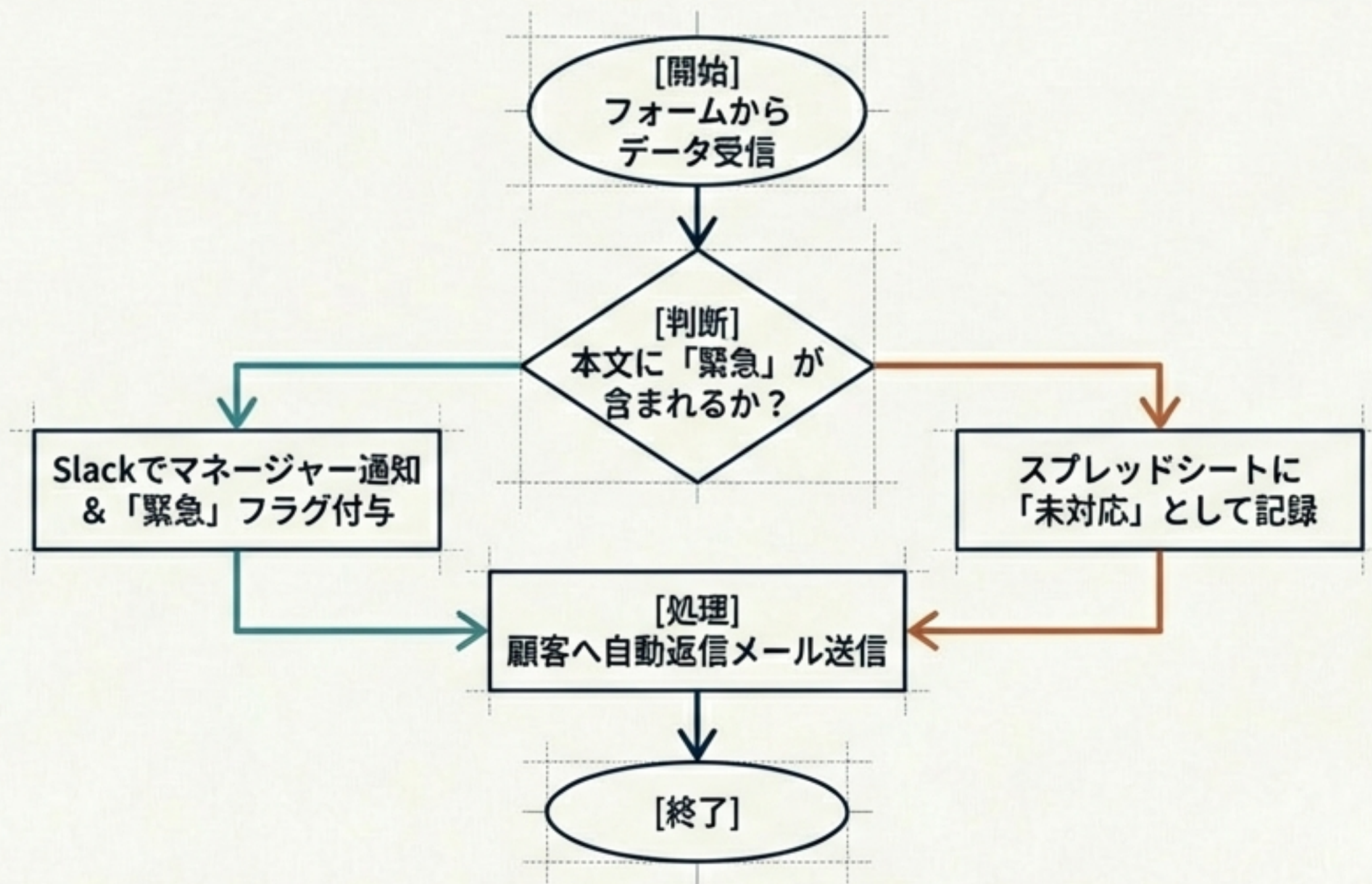
Webサイトから問い合わせが来たら、内容を見て
対応しておいて

具体的に何を
チェック？

メール？電話？
記録？

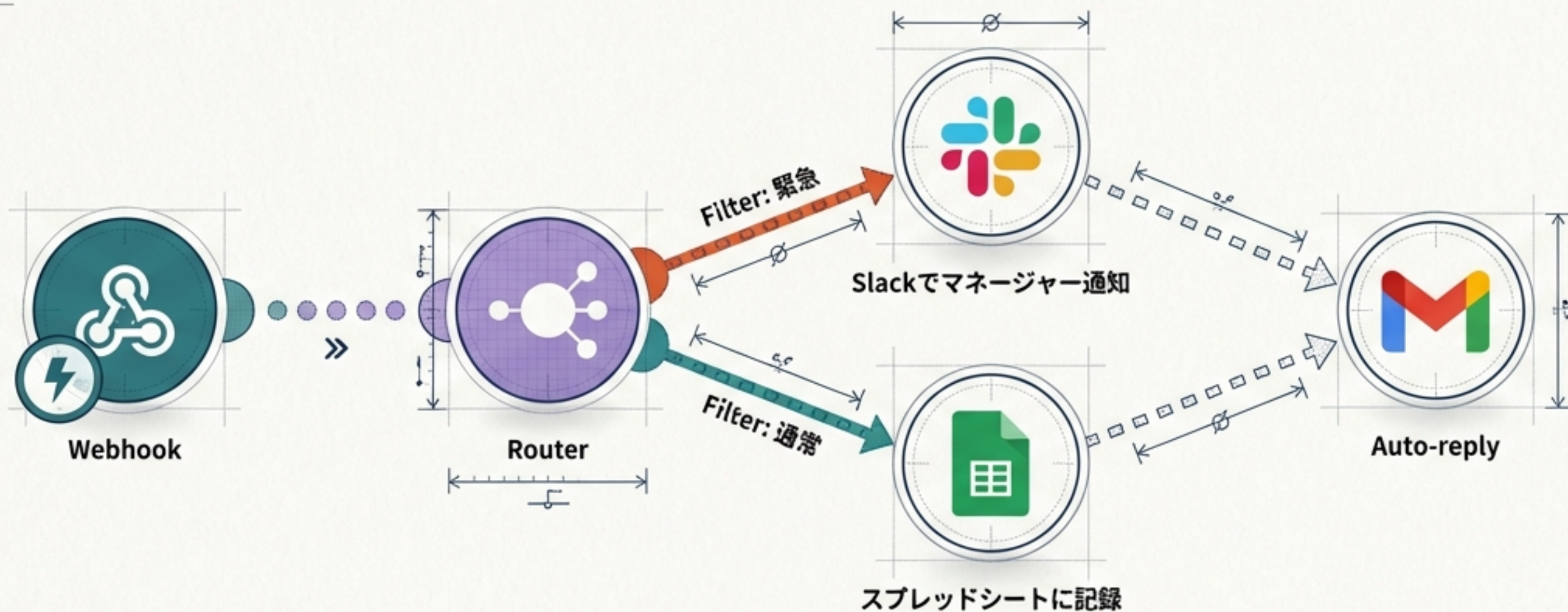
Status: 言語化されておらず、属人化している状態。自動化不可能。

実践例：プロセスとしての記述（After）



Status: 条件と手順が明確。自動化可能な状態（Blueprint）。

Make.comでの実装イメージ



フローチャート通りの形が、そのままツール上で再現されます。

初心者によるある失敗パターン



タスクの境界線が曖昧

どこまでが「入力」で、どこからが「確認」か。区切りを明確にしましょう。



「他者への依頼」が消えている

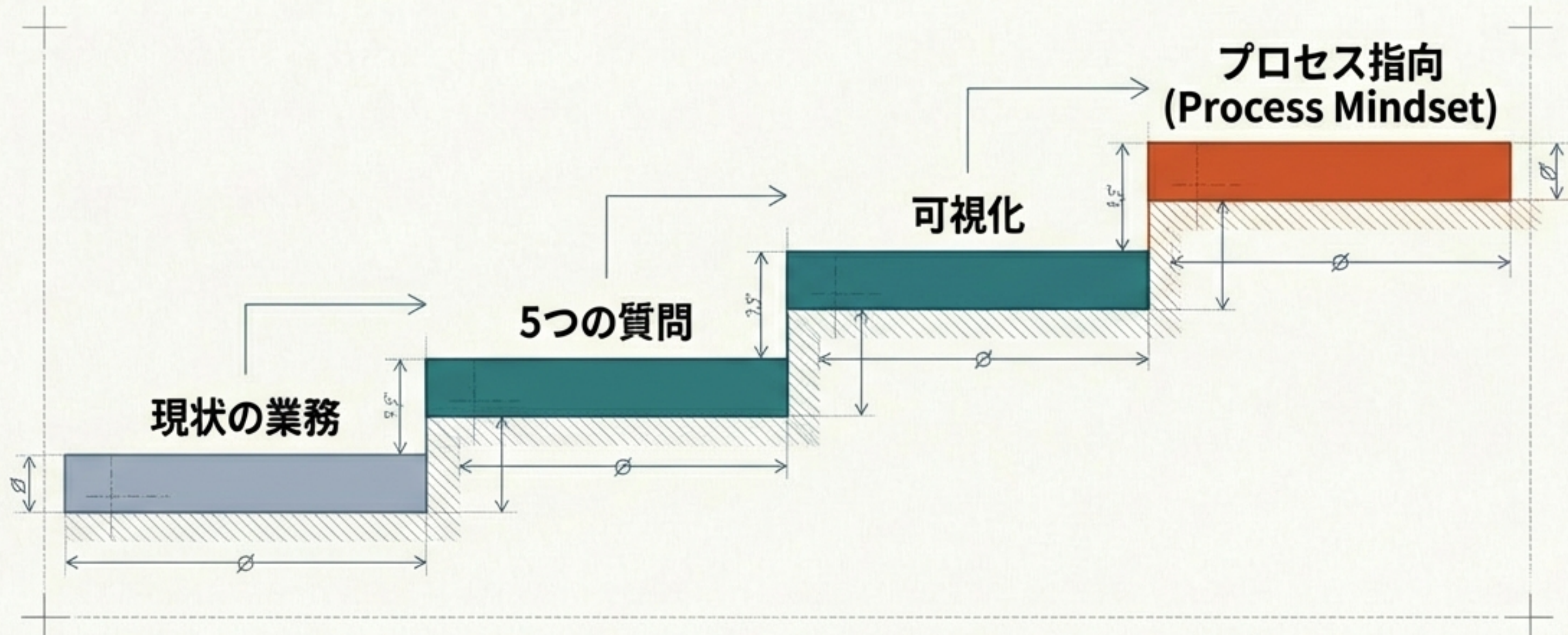
「終わったら次の人に渡す」ではなく、「メールで通知し、ステータスを変更する」という具体的なアクションとして記述します。



粒度がバラバラ

「PCを起動する」と「決算を完了する」を同じレベルで書かない。適切な粒度（モジュール単位）を意識しましょう。

プロセス思考は「後天的スキル」です



業務をプロセスとして分解する力は、特殊な才能ではありません。エンジニアであっても、経験を通じて身につける技術です。最初うまくいかなくて当たり前です。「5つの質問」を繰り返すことで、徐々に脳が「プロセス指向」に変わり、業務の解像度が上がっていきます。

まとめ：さあ、業務をロボットに説明しよう



1. 曖昧さの排除: 「いい感じに」をやめて具体的指示へ。



2. 可視化: フローチャートとスイムレーンで地図を描く。



3. 分解: タスクを手順（モジュール）レベルまで砕く。



4. 実装: 描いた地図をMake.comでなぞる。

あなたの業務知識（ドメイン知識）と、このプロセス記述力が組み合わさった時、強力な自動化が実現します。

まずは1つの業務のフロー図を描くことから始めましょう。